東方ガンダム伝

parui

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

東方が弾幕ではなくＭＳで戦う世界だったら。そんな妄想。

東方とガンダムのクロスオーバー。

目　次

紅霧異変編その一【解決に向けて】　1
紅霧異変その二【門を守るシェンロンガンダム】　6

紅霧異変編その一【解決に向けて】

「この紅い霧もうこれで三日目ね」
「そうだな。消える気配は全く無いぜ。寧ろ濃くなってないか？」
「あからさまに濃くなってるわね」
「こりゃ、原因は最近現れた湖の畔にある真っ赤な屋敷で間違いなさそうだぜ」
「そりゃあねぇ」
　それは誰から見ても明らかだった。
　紅い屋敷は五日前に現れた、紅い霧は三日前に発生した。
　これで違うとなったらとんだ笑い話だ。
「私はそろそろ出るわ。あんたは？」
「私か？そりゃあ、いくぜ！
　あんな面白そうで財宝がありそうなところに行かない理由がないぜ！」
「あっそ」
「自分で聞いておいてえらく適当な返事だな」
　パイロットスーツを着ながら憮然と言う魔理沙に不満げに返す。

しかし、それも無視されてしまった。
「待てよ霊夢～、私も着るからさ～」
「はいはい待つわよ」
急いでパイロットスーツを着る魔理沙を横目に、
霊夢は紅い霧を発生させている張本人の目的を考えていた。
目的はなんなのかしら？
何の妖怪なのか見ればわかると思うけど。
私の予測があっていれば可能性が高いのは吸血鬼かしらね。
あいつら太陽に弱いし。
「霊夢い夢聞えてか」
「え？」
「おい」
「何よ」
「さっきから呼んでるのに何で返事しないんだぜ」
「あぁ、ごめん。ちょっとボーッとしてた」
「ホントかー？」
「嘘をつく理由もないでしょ？」

「まぁな！」
「じゃ、行きましょうか」
「おう！」
　そして、二人は各々の機体に乗り込んだ。
「博麗霊夢！ストライクフリーダム！行きます！」
「霧雨魔理沙！ゼフィランサス！行くぜ！」

―機体分析―
パイロット【博麗霊夢】機体【ストライクフリーダムガンダム】
《武装》
　３１ｍｍ近接防御機関砲
　クスイフィアス３レール砲
　シュペールラケルタ　ビームサーベル
　高エネルギービームライフル
　カリドゥス復相　ビーム砲
　スーパードラグーン　機動兵装ウィング

ヴォワチュール・リュミエールシステム
ビーム突撃砲×８
ビームシールド×２
《備考》
高機動空戦形態
『ハイマットモード』
全武装解放形態
『フルバーストモード』
パイロット【霧雨魔理沙】機体【ガンダムゼフィランサス】
《武装》
６０ｍｍバルカン砲
ビームサーベル×２
ビームライフル
９０ｍｍマシンガン
シールド

「にしてもあっかいなぁ……」
「そうね。早く解決しないと洗濯物は乾きにくいし寒いしで散々だわ」
「まぁまぁ、ゆっくり行こうぜ」
二人の会話を見ている人物が一人。
「そーなのかー……」

紅霧異変その二【門を守るシェンロンガンダム】

「ここを通すと思うなよ?」
「あら、私は通るけど?」
「フフフ」
「おい」
「何よ?魔理沙」
「前回の最後のあれはなんだったんだ!?」
「あれって何よ」
「ほら、最後さぁ、そーなのかーってあったろ!?」
「ああ、ルーミアのこと?あいつなら倒したじゃない」
「そんなこと知ってるぜ!チルノは私が倒したしな」
「じゃあ何よ」
「最後あんな次戦いますよー的なアピールしといて出ないのかよ!?」
「アピールとかよくわかんないんだけど」
「ああ、もう良いぜ」

「そ、そろそろいいか？」
「あぁ、ごめんな。待たしちまったぜ。どうぞこいつと戦ってくれ」
「押し付けんのかい」
「何て言うか…ちょっと疲れたぜ」
「ふーん…まぁいいわ」
「よ、よし。では名乗りをあげさせてもらうぞ！
我が名は紅美鈴！私が使う機体はシェンロンガンダム！私はナタクと呼んでいる！
貴様の名と機体の名を名乗れ！」
「面倒ね…私の名前は博麗霊夢。使う機体はストライクフリーダムガンダムよ」
「よしわかった。ではいざ勝負！」
『ガンダムファイト！レディイイイイイ！ゴォオオオオオオ！』

―機体分析―

パイロット【紅美鈴】機体【シェンロンガンダム（ナタク）】

《武装》

ドラゴンハング（火炎放射機×２）
ビームグレイブ
シェンロンシールド

バルカン×2

戦いの始まりを告げる二人の叫び声が響き渡る。
それが消え去るや否かのタイミングに美鈴がドラゴンハングの伸ばし、
霊夢に攻撃する。
「甘いわね」
霊夢がビームシールドで防ぐ。
「甘いのはどちらだぁ!?」
「は?」
「火炎放射!」
ビームシールドを越えて炎がストライクフリーダムを襲う。
数秒の沈黙と炎に隠れるストライクフリーダム。
どうなったんだ?
魔理沙がそう呟こうとしたとき何かが見えないストライクフリーダムから飛び出す。
「なんだ!?」
美鈴が叫んで、周りを見回す。

「なんだあれは……？」
「ドラグーン！」
魔理沙には見えない何かから発せられたビームがシェンロンを襲う。
しかし、流石は軽兵装のガンダムで、ある程度は避ける。
だが、数が多かったからか、ドラゴンハングと右足が被弾し、破壊される。
「やっぱり妖怪は流石ね。人ならこれが見える人は少ないわ」
ストライクフリーダムが炎の中から見えだした。
シールドがやられ、ところどころ壊れている。
驚愕の表情を浮かべた魔理沙がストライクフリーダムを見ていると、あることに気づいた……
「後ろの羽が……小さい？」……!?
「あら、魔理沙も気づいたのね。そう、あの羽は分離して遠隔操作できるのよ」
「クソッ！被弾した！今の兵装でどうにかなるか……」
美鈴が青ざめた顔で言う。
「どうにかなると思っているの？」……
そう言って霊夢は横になったシェンロンにビームライフルを向ける。
「……っくそ！まだだ！まだ終わらんよ！」……

撃つ前にシェンロンはビームグレイブを出し、ジャンプする。
「これでお仕舞いよ」
ビームライフルの引き金が引かれる。
ピンク色のビームがシェンロンを貫く。
シェンロンは消え、気絶した美鈴が見える。
どうやら勝ったようだ。
「おぉ～、勝ったな霊夢」
「此くらい勝たないと話にならないわよ」
「じゃあ、紅魔館に乗り込むぜ！」
「そうね。とっとと首謀者の首根っこ捕まえて全部吐かせて終わらせましょう」
「次のやつは飛ばすなよな！」
「はぁ？」
「いいや！何でもないぜ！」